

JASIS

NEWS

No. 34

2005/5/20

日本インテリア学会会報

■第16回大会研究報告ピックアップ

1) 昭和 10 年代の暮らしにみる家電製品と洋家具 —ある家族の事例から 2—

長山洋子（文化女子大学）

本研究は、1936（昭和 11）年、日本女子大学校に提出された小林孝子の卒業研究『考現学より見たる一家庭』を検証するものである。

当時非常勤講師だった今和次郎の指導により「あなたの家にあるものをすっかり書きあげてはどうか」と助言を受けテーマとした。孝子は「明治末期の 5 年間、大正、昭和にわたって存在した一家庭を、出来るだけ沢山の角度から眺めて、いわくいんねんをただし、不思議に思われることはその趣をそのまま書きしるした」と述べ、自家とモノを徹底的に調べ、その特徴や由来、生活との関連を克明に筆記し、膨大な数のスケッチ、カタログ写真等を使って記録した。さらに、家人の出入り、来訪者、料理屋等の利用、電話、1 週間の献立など生活の調査を行っている。これら孝子が残した考現学的資料を通して、1935 年における中産階級知識人の一家庭の生活を明らかにしていく。また、本研究を進めるにあたり孝子（89 歳）から聞き取りによる補足調査を行った。現在、孝子は昭和 13 年に今和次郎が設計した自宅で一人暮らしをしている。

これらの資料から小林家の暮らし方を整理すると、住まいは 1912 年（明治 45）に建てられた木造平家建て瓦葺の純日本家屋を 1916 年（大正 5）に家賃 17 円で借り、その後 1921 年（大正 10）に 4,000 円で購入した。孝子は論文の中で「ミニマムサイズの家であるがこれから調べだした膨大な持ち物の容器であるが故に人間が遠慮しつつ生活を営んでいる観がある」と述べている。家族は一人娘の孝子、元海軍軍人で東京電燈勤務の父、高等女

学校教師の母、祖母、女中の 5 人で、経済的に恵まれた暮らしだった。祖母が家事一切を取り仕切り、献立は和食中心だったが朝食の牛乳と果物、10 時のコーヒー、夕食のデザートには果物が登場した。また、既に洋家具、洋食器、ガラス製品、家電製品、洋服その他数々の新しいモノが取り入れられていた。

本編は、2003 年の報告に続くもので、家電製品と洋家具に着目し、いつ頃取り入れ、どこに置き、どの様に使用したか、和風の住まいと暮らしの中に同化していく一過程を検証した。小林家では、海外との交流を持つ客の出入りが多く、洋風の生活様式にも馴染んでいたと思われるが、住まいは伝統的な日本家屋のままで、新しい家電製品は合理的な暮らしを支えるものではあるが、空間との整合性は取れていなかった。籐椅子セットやピアノもその置き場となる空間を用意する事はなく用途に応じて持ち運び暮らしになじませながら使っていたことが分かった。

2) 住宅のインテリア空間の生態学的研究

石橋 実*、宮平繁昌**、金岡千晶***、加藤力****

（*パナホーム株式会社、**京都工芸繊維大学大学院、
宝塚造形芸術大学大学院、*宝塚造形芸術大学
大学院教授）

①研究の目的

これまで住宅のあり方は耐久性や構造耐力、居住性能など殆ど物理的な方法で論議されて来た。住空間の心理面についての研究は不満足な点が多い。本研究は生態学を応用して、生物学的立場から空間の質に関する因子を明らかにし、住宅設計・販売者に新しい手法を開発・提供することを目的とする。

②研究の背景

戦後、住宅産業は商品化住宅が普及し、住宅の物理的

性能は進歩をとげた。特に、住宅の品確法の制定によって、ほぼ満足できる段階まで到達した。従来の住宅の購入者が、戦前の和風住宅に住んだ経験を持ち、昭和 30 年代を境にして住宅は洋風化し、椅子式の起居様式に住み手は戸惑いながらも新しい生活に慣れてきた。若い人たち（インテリア第 2 世代）は生まれた時から洋風の暮らし方を経験して育ってきたので趣味、嗜好がそれまでの人達とは違う。それは生理面や機能面ではなく、主として心理面や感覚面において大きい。インテリア第 2 世代の満足度を高めるための手段が必要になってくる。

③研究の方法

- ・「空間の質の因子とは何か」を明らかにするため、建築家による空間の質に関わる言説や住宅作品に関する文献を分析して言葉（キーワード）として抽出する。さらに、住宅設計者にはアンケート調査を行い、プロトコルの観点から分析し、キーワードとして抽出する。
- ・次いで、実際に設計・施工された過去の幾つかの住宅を対象に、インテリア空間の質の因子がどのように適用されているか、その適用実態を明らかにする。
- ・さらに「インテリア空間の質的因子」が住宅に組み入れられている時、どのような効果があるかなどを調べることで、質の因子の効用実態について明らかにする。

④まとめ

インテリア空間の質を規定する因子の抽出で、建築家のそれと、住宅設計者に分けて抽出した結果、ヒューマンスケール、重心と中心、気配、分節、焦点、シーケンス、アルコーブなど 40 の因子にまとめられた。建築家による住宅の方が住宅設計者による住宅よりも多く「質の因子」を含んでいて、両者の間では、その内容、適用度合に差異のあることが解った。また空間の質因子による住宅分析によって特性抽出が可能であることが窺えた。

今後は商品化住宅における販売、営業現場に「インテリア空間の質の因子」を組み入れる手法開発を試みる。

3) ロボットと人間との相互交流に関する試行実験

林田和人（早稲田大学理工学総合研究センター）

アニメなど架空の世界のものであったロボットが、ロボット工学の進歩により、ある程度の知能を持ち自在に動き回ることができるようになってきた。近い将来このようなロボットが人間に対してサービスを行うため、住宅や公共空間に入り込んでくることは容易に想像できる。

そこで我々研究グループは、人工物であるロボットと人間とが共生する環境を研究対象とし、以下の 4 つの連報で報告を行った。

①交流前後におけるロボットから受けるイメージ

ロボットに対するイメージを明らかにするため、複数の形容詞対による SD 法で意識を探った。

非人間型よりも人間型ロボットに対して愛着を持ち、男性よりも女性の方がロボットに対して慣れ親しみの感覚を持つことが明らかになった。また現状では機能に限界があるため、交流後には人間型ロボットに対してさえも愚鈍なイメージを持つことが分かった。

②ロボットのデザインと作業イメージの関係

人間型と非人間型ロボットに対する適した作業を明らかにするため、その形状に対する人間のイメージの観点から意識調査を行った。

男性は女性よりロボットが会話の相手に適していると考えており、特に人間型は人と接するコミュニケーション作業に適していることが分かった。また非人間型は、情報の提示や、決められた作業を行うような機械的作業に適していることが明らかになった。

③ロボットとの交錯時における人間の回避行動特性

複数の角度から、非人間型ロボットを移動中の被験者に接近させ、ロボットに対して危険や不安を感じない近接距離で回避を行ってもらいその経路を記録した。

進入角度ごとに近接距離をまとめ、男女別に比較した結果男女差は見られなかった。対面歩行者に対する側方回避距離は 800~1,200 (mm) であることが知られているが、この数値の半分程度の距離で回避を行っていた。

④ロボットと人間との対人距離に関する検討

立位、椅座位、しゃがみ、仰臥位の姿勢を被験者がとり、人間型と非人間型ロボットをそれぞれの姿勢に対して接近させ、「会話しやすい距離」および「これ以上近づけたくない距離」を合図させ計測した。

対人間のパーソナルスペースの場合、その形状は前方に広い卵型ということが知られているが、対ロボットでは形状は円形に近いものであった。また、立位、椅座位、しゃがみ、仰臥位になるに従って、両距離とも短くなることが明らかになった。

■運営委員会だより

1) 総務委員会

委員長 上野義雪（千葉工業大学）

平成 16 年度における主な学会活動は、例年の活動に加え、AIDIA 東京大会の開催がある。AIDIA 東京大会は加藤実行委員長を中心に実行委員会委員の協力により無事閉幕することができた。この東京大会と同時開催の IPEC21 パネル展示、日本インテリア学会第 16 回大会（文化女子大学）開催など、関係者のご協力に心中から御礼を申し上げる。

運営面では、年末に事務局の移転を行い、藤城事務局長から東京大学西出研究室へバトンタッチした。藤城事務局長のこれまでのご尽力に対し感謝を申し上げますとともに、西出研究室のお力添えを心からお願いしたい。

また、会員の満足度を高め、総務委員会の円滑な運営や若手会員による学会運営への移行を視野に入れ、若手の委員補充や総務委員会会議の設置を行った。多くの問題を少しでも解消できるよう、会長を中心に裏方として努力する計画である。

会員のご協力を心からお願いする次第である。

2) 論文審査委員会

委員長 直井英雄 (東京理科大学)

本年度第 15 号の論文報告集がやっと発刊されました。毎年のことですが、当委員会の不手際により大幅に遅れてしまったこと、お詫びいたします。

さて、インテリア関係の論文発表の場としては、この国内の論文報告集のほかに、本学会も関係している国際論文誌「AIDIA journal」があることはご承知のことと思います。昨年の AIDIA 大会では、わが国が担当して第 4 号を発刊いたしました。第 5 号以降も続けられることになると思います。具体的なことについては、今、国の間で議論している最中ですが、分かり次第お知らせいたしますので、そちらについても考えおきください。

3) 広報委員会

広報委員長 湯本長伯 (九州大学)

広報委員会は、学会の広報及び公聴機能を分掌しております。

平成 16 年度の活動報告を致します。

①会報 (年報)

総会前に、会報 34 号 (平成 16 年度・年報) を発行致しました (本号)。

内容的には、大会関連の内容も含め、平成 16 年度の学会内の活動報告を中心に致しました。

年間の発行予定は、

- ・総会後に、総会報告と大会情報 (お誘い) を合わせて、夏号を発行
- ・秋の大会後に、大会報告を中心に発行 (晩秋号/年内)
- ・総会前に、お知らせや大会報告補遺を含めて、春号を発行

以上に加え、一年の総集編として年報を発行しています。平成 16 年度は大会報告号が遅れ、春号と年報が接して発行となりました。

年間の費用は、一回分の費用が 20 万円を超えないよう、コスト削減に努めていますが、その分が委員の負担となっており、余り長続きするやり方ではないと思われ、委員長としては苦しいところです。

また大会関係の座長報告は、学会活動にとって大切なものですから、座長の先生方のご協力に感謝すると共に、会員の皆様におかれても、色々ご意見をお寄せ戴き、より良い形式や内容に近づけて行きたいと思います。現在、大会で発表をしない会員の方に、大会での発表の一部をピックアップして、会報にてお知らせしております。もし関心を持たれた場合は、ぜひ大会予稿集を購入されて、内容の吟味あるいは発表者との討論などに進んで戴ければ幸いです。宜しく願い申し上げます。

ご意見を戴ける場合は、編集委員会の渡邊あるいは白石までお願い致します

(宛先: 会報 hidet.watanabe@nifty.ne.jp、
年報 shiraish@oyama-ct.ac.jp)

②ホームページ

既にお知らせしましたように、連絡用・事務用のデータ等を収納した事務ホームページを開設しております。AIDIA 日本大会の実施に当たっては、メイリングリストと共に、事業連絡や会合の情報等の周知に大活躍しました。

<http://www.kyushu-id.ac.jp/~ymtlab/JASIS/aidia2004.html>

当面は、ドメイン取得などを含めた本格的な HP の開設については、会の財政上も難しいと思いますが、取り敢えず実質的な不便の無いよう対応致します。

インテリア学会・事務ホームページ URL

[http://www.kyushu-id.ac.jp/~ymtlab/JASIS/\(index.html\)](http://www.kyushu-id.ac.jp/~ymtlab/JASIS/(index.html))

事務ホームページのメイン URL です。

[http://www.kyushu-id.ac.jp/~yumoto/JASIS/\(index.html\)](http://www.kyushu-id.ac.jp/~yumoto/JASIS/(index.html))

上記のミラーサイトです。同じ内容が入っております。上記に事故ある時、ご利用下さい。

なお、<http://www.kyushu-id.ac.jp/>は、<http://www.design.kyushu-u.ac.jp/>と同じです。

ご意見を戴ける場合は、編集委員会の湯本/九州大学までお願い致します。

(宛先: yumoto@design.kyushu-u.ac.jp アドレスにご注意下さい)

なお、現在 HP には、構法・計画委員会のマネジメントによる「工事標準仕様書」の試作版が、公示されております。本年度に修正版が発行予定ですが、お気づきの点のご意見をお願い致します。

<http://www.kyushu-id.ac.jp/~ymtlab/JASIS/kindex.html>

ご意見を戴ける場合は、編集委員会の湯本/九州大学までお願い致します。

(宛先: yumoto@design.kyushu-u.ac.jp、アドレス変更しています)

③問合せ

広報公聴を担当する広報委員会が、戴いた問合せを整理して各担当に連絡致します。前回にもお知らせした連絡事務所に、何なりとご連絡下さい。

電話: 03-5953-8575

(インテリア学会と教えてください)

FAX: 03-5841-8515 (FAX のみです)

④その他

以前にもお伝えしましたが、多くの学会では今、「受付窓口の集約代行化」と「メールニュース」開設が進み、合理化が広範に行われつつあります。「メールニュース」を受け取れない方のためには、FAX による代替手段が取られており、ニュース発生から数日間での情報共有が可能となっています。そこで来るべきニュース開設の準備のため、機会を見つけて事務局まで「メールアドレス、またはそれに代わる FAX 番号」を、お知らせ下さい。事務局への連絡の折に、宜しく願い申し上げます (既に、お知らせ戴いている方は不要です)。

■支部だより（年度報告等）

1) 北海道支部

支部長 澁谷邦男（札幌高専）

2004 年度北海道支部の主催行事としてデザイン講演会が4月24日に行われた。テーマは「韓国の家具・デザイン」で、講師は大韓民国弘益大学校美術学部木造形家具学科 YUN YO-HANG 副教授。会場の北海道浅井学園大学北方圏センター「ボルト」には学会員、専門家、後援のインテリアプランナー協会会員、学生など50名が集った。YUN YO-HANG 先生は早くから韓国で家具の教育にあたりと共にクラフトも手掛けるプロダクトデザイナーでもある。旭川とは国際家具コンペティション行事に学生共々参加するなど交流が始まり、この一年は北海道東海大学にサバティカルで昨年一年間滞在、この度の第6回国際家具デザインコンペティションの審査委員を務めている。講演では韓国デザインのホットニュースやデザイン教育の内容が詳しく述べられ、刺激に満ちた講演会となった。

2) 東北支部

支部長 若井正一（日本大学）

東北支部は、平成12年11月11日に東北芸術工科大学を会場に設立総会が開催されて本年度で6年目になります。初代支部長には、日原もとこ先生（東北芸術工科大学教授）が就任されて、昨年度までの5ヶ年度にわたり支部活動のリーダーとして関わってこられました。この間、日原先生は、平成15年11月に東北芸術工科大学を会場に開催された本学会第15回大会の実行委員長として、ご活躍されました。その後、昨年度の支部総会において役員改選が議題となり、審議の結果、平成17年度から新しい体制で支部運営を行うことになりました。その新役員の体制は、本学会会報 No. 33 号の支部だよりに掲載されています。

さて、これまで東北支部の活動は、支部会員の所属地域の関係で山形と福島が中心となっていました。新体制の支部活動では、これまでの活動実績を踏まえて、宮城、岩手、秋田、青森にも活動を広げて行きたいと存じます。特に、新球団の野球で賑わっている仙台は、東北の中心でもあり、大学やインテリア関係者も少なくないことから支部活動の新たな拠点を構築したいと考えております。また、昨年度から始まった支部研究報告会は、今後も会員の研究や作品の発表の場として継続させたいと存じます。しかしながら、今後の支部活性化は、支部会員だけで推進できるものではなく、本部役員の皆様方および他支部会員各位のご支援があってこそ達成できるものと思いますので、一層のご指導をどうぞ宜しくお願い申し上げます。

3) 関東支部

支部長 小原誠（文化女子大学）

昨年10月15日開催の第3回AIDIAの開催にあたり、関東支部はAIDIA実行委員会の要請で、招待ゲストのホテル予約、懇親会の手配、および開催日の会場設営・進行、撮影等のサポート作業を担当しました。このため今年度はAIDIA関係の作業分担、折衝、実行委員会との調整、実行資金の支部積立金拠出問題などで半年を経過し、また年度末には、評議員選挙と支部幹事役員選挙のため、支部行事がほとんど出来ず、CAD部会との共催による講習会を2回開催するのみに終わったことを申し訳なく思っております。新年度は懸案になっております見学行事や研究会を次期幹事諸氏にお願いしたいと思います。

4) 関西支部

支部長 北浦かほる（帝塚山大学）

- ① ジョージ・ナカシマの家具（桜製作所）とイサム・ノグチのアトリエ（庭園美術館）見学会（平成16年7月3日、参加者17名）
- ② 国際美術館と graf ビルディング見学会（平成16年10月8日、参加者28名）
- ③ 関西支部名簿の整理（平成16年6月）
- ④ 関西支部費よりAIDIAに寄付（平成16年8月10日）
- ⑤ 関西支部評議員選挙とその結果報告（平成16年11月末～12月10日）（支部会員への封書による無記名投票及び、葉書による選挙結果報告）
- ⑥ 関西支部新・旧合同評議員会（平成17年2月26日）
 - ・ 支部長・副支部長の選出・承認
 - ・ 17年度関西支部活動内容について
 - ・ 支部会員の把握と名簿の整理について
 - ・ 支部規約の附則の追加について
 - ～支部長の選出方法についてのとりきめ
 - ・ その他（評議員の欠員に伴う次点者の補充）
- ⑦ 支部長と副支部長（2名）による支部活動企画会議
～大阪市大文化交流センターにて（平成16年5月1日、平成16年8月7日、平成17年1月15日、平成17年2月26日）
- ⑧ お知らせ
 - ・ 増田稔氏が平成17年2月27日に結節性多発動脈周囲炎のため逝去されました。ご冥福をお祈りいたします。
 - ・ 17年度の評議員選挙結果は既に葉書でお知らせしましたが、梁瀬度子氏のご辞退により、次点の増田稔氏が選出されました。その後、増田稔氏をご逝去されたので、次々点の植松華子氏になりました。
 - ・ 関西支部所属会員が正確に把握できない状況になっています。名簿整理などの努力をしましたが、支部の努力だけでは無理な状況で本部段階で実施してもらう必要があります。関西支部からの連絡が来なくなっている方は他支部の所属になっている可能性がありますので、関西支部事務局までご連絡下さい。

■研究部会だより

1) 教育部会

部会長 北浦かほる(帝塚山大学)

①日本インテリア学会卒業作品展－10年のあゆみ

平成16年10月01日発行－教育部会が中心になって継続させてきた卒業作品展が11年目を迎えたのでこれまでの軌跡を残しておくために資料を集めてB4－24頁の冊子500部を作成し、大会参加者に配布しました。少額の部会費を工面してつくったので全会員に配布出来なかったのが残念です。

②第11回卒業作品展覧会の開催

～文化女子大学にて 平成16年10月16日～

③教育部会シンポジウム(平成16年10月16日)

－わが校のインテリア教育の特徴－

教育部会が連続的に実施してきている教育研究会で、本年は文化女子大、共立女子短大、都立工芸高校の各インテリア教育の内容をご報告いただき、各教育機関からの問題提起を糸口に会員との質疑応答でインテリア教育の現状を振り返りました。

④部会活動及び方針を決定するための幹事会の開催

- ・教育研究会の開催についての企画・検討
- ・恒例の卒業作品展開催の準備について
- ・卒業作品展10年の記録・まとめ冊子の企画・発行
- ・人材の育成と社会的現状把握調査の企画・検討

卒業生の進路希望と社会的な人材需要及び教育の役割についての現状把握を行いたいという主旨で、卒業生と企業への調査を検討中ですが、なかなか難しくてまとまらない段階です。(平成16年1月24日、5月14日、7月26日、10月16日、平成17年2月7日、3月23日)

⑤お知らせ

教育部会員のメンバーを募集しています。興味をおもちの方、教育について悩みや疑問を感じておられる方は是非ご参加下さい。共に話し合しましょう。

kitaura@tezukayama-u.ac.jp

TEL. FAX. 0742-41-4773

2) 人間工学部会

部会長 白石光昭(小山工業高等専門学校)

今年度は、幹事間で環境工学系(光環境)のテーマをもとに研究会を計画しましたが、部会長の日程が合わず、次年度に持ち越すこととしました。このため、平成16年度は一度も研究会等を開催できずに終了した。会員の

方には大変申し訳なく思っております。

平成17年度に上記の研究会をできるだけ早い時期に開催するとともに、年度後半に別のテーマで研究会を開催したいと考えています。なお、本インテリア学会には環境工学系の部会がないことから、次回を上記のようなテーマに計画していますが、基本的には部会名に合わせた内容を中心に研究会を開催していく予定です。

また、会員の要望を広く収集し、ニーズの高い内容の研究会を開催していきたいと考えていますので、要望のある方は部会長までご連絡ください。

(shiraish@oyama-ct.ac.jp 小山高専 白石光昭)

3) CAD部会

部会長 川島平七郎(東横学園短期大学)

インテリア製図法WG主査

奥田宗幸(東京理科大学)

CAD部会は、インテリアCAD表現手法WGとインテリア製図法WGとで構成されています。今回は、製図法WGの今年度の活動計画について報告いたします。

インテリアを表現する表現方法は、インテリアに最も関連のある建築製図の表示方法「JIS A0150 建築製図通則」に従って表現されています。しかし、インテリアを正確に、しかも詳細に表現するためには、これだけでは十分とはいえません。平成15年度、製図法WGによって実施した「インテリア製図における表現手法の現状調査」(インテリア設計等を行っている企業188社に対してアンケート調査)においても、インテリア製図の規格(例えば建築製図通則に当たるもの)の必要性について、全体の55%の人が必要、28%の人が不必要と回答しています。

インテリア製図の標準的な表現方法を確立するために、上記の調査を踏まえて、「建築製図通則」のインテリア版である「インテリア製図通則(案)」の作成を今年度の製図法WGの目標としています。案がまとまった段階で、インテリア学会および関係者から広く意見を聞き、内容を詰めていきたいと考えています。インテリア製図に標準化が必要かという意見もありますが、概念的な議論ではなく、インテリア製図通則(案)を作成し、それが必要か否か、そして、その中のどの項目が必要か否かというように具体的な議論を行いたいと考えています。

現在、インテリア製図においてCAD、CGの使用が一般的となっており、CADによる表現の標準化も課題です。現在、製図に関するJISはISOに準拠しており、ISO/TC10:製図(Technical product documentation)の動向も調査することになっています。

■事務局より

1) 会費納入のお願い

この件で何度かお願いをしておりますが、未納の方は会費の納入をお願いします。会員皆様が公平にサービスを受けられますようご協力くださるようお願いいたします。なお、学会としましては予算の無駄を省いていくよう努力していきます。

■訃報

当学会正会員であり、歴史部会幹事（関東地区担当）の山崎純（東京工業大学仙田研究室）先生が平成17年3月10日に逝去されました。

■編集後記

本年度（平成16年度）の年報となる第34号です。相も変わらずですが、大幅に遅れましたことをお詫びいたします。各支部長、各委員長、各部会長、研究トピック担当の方には十分な執筆時間を確保することができず、大変失礼いたしました。しかし、ご多忙中にもかかわらず、多くの方から原稿をいただきました。御礼申し上げます。

広報委員会では、会報の編集あるいは発行に関して、多くの方に参画していただき、新たな方向性を検討したいと考えております。そして、会報を情報交換の場として活性化し、ひいては学会の活性化を図っていきたいとも考えております。

広報委員会では会報がマンネリ化していると感じておりますが、同じメンバーではなかなか新しいアイディアもでにくくなります。ちょっとしたアイディアでも結構

ですので、ありましたらご連絡ください。よろしくお願いいたします。

（白石光昭 shiraish@oyama-ct.ac.jp）

■事務局

日本インテリア学会事務局

事務局長 西出 和彦

（東京大学大学院工学研究科 西出和彦研究室）

〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1

TEL : 03-5841-6168 / FAX : 03-5841-8515

tnishide@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp

■日本インテリア学会会報第34号（2005.5.20発行）

編集者：湯本長伯、白石光昭

発行者：高橋鷹志（日本インテリア学会会長）

広報委員会：湯本長伯、小林輝暉、藤城幹夫、
渡辺秀俊、白石光昭